最終報告レポート

マレーシア、インドネシアでの調査、ネットワーク作り、習得と共同創作 –アジア共同舞台芸術チーム編成に向けて

1.活動概要

プロジェクトの概要

『アジア発の新たな芸能を創るための国際チーム編成に向けて、インドネシア、マレーシアの各地で伝統芸能を基礎に持つアーティストと交流し、ネットワークを作る。そして彼らと共演し、公演、レコーディングといったコラボレーションを実践する。また同時に、伝統楽器の習得、芸能の調査も行う。伝統音楽、文化を深く理解し、アジア独自の新たな芸能の創作のためのインスピレーションを得る事、またコラボレーションという切り口から、新たな芸能の在り方を見出すための知識と経験を得る事を目的とする。』

本プロジェクトにおいて実際に行なった主な活動は以下である。まず、バリ舞踊家の小谷野哲郎氏が主宰する、インドネシア・日本伝統芸能コラボレーション公演『プルサダサンタ』 インドネシアツアー に参加し、バリ、ジョグジャカルタ、チカランで公演を行った。その後、中部ジャワのジョグジャカルタ、ソロで調査を行い、東ジャワのポノロゴへ移動。ダンサー、ウィスヌ・hp氏の元で伝統芸能レオッグの調査、楽器クンダン・レオッグの習得、コラボレーションの公演とレコーディングを行った。そしてバリへ移動し、音楽家イ・マデ・スバンディ氏のスタジオに滞在。祭礼日ガルンガン、クニンガンの芸能調査、バリ音楽調査、楽器クンダン・バリの習得とコラボレーションの録音を行った。その後はスンバ島、スラウェシ島ブルクンバ、マドゥラ島スメネプ、ジャワ島スラバヤ、バニュワンギ、バリ島ヌガラで伝統音楽の調査とコラボレーション録音を行った。

マレーシアでは、2018年1月にマレーシアで制作したコラボレーションCD作品『Malay Sunshine』を持参し、各地のアーティストに配給した。クアラルンプールでは、『Malay Sunshine』発表公演として、コラボレーターのカムルル・フシン氏、アミル・ハムザ氏と公演を行った。公演を行ったRAWアートスペースと交流を深め、その他のイベントにも出演した。マラ工科大学UiTMにて、カムルル・フシン氏から格闘技舞踊シラットの随伴音楽の太鼓グンダン・シラットを習った。その後クランタン州へ移動し、シラットの調査を行い、伝統芸能ディキール・バラットの公演にゲストとして参加した。その後、ネグリスンビラン州ジジャン村にて、コラボレーターのアミル・パーカッションに参加し、クダーでの公演に参加した。

今回の活動で交流、共演、調査を行い、楽器を習った音楽、人物

ー共演者および共演した音楽

(公演)

インドネシア　小谷野哲郎氏チーム　(11/29バリ、12/1チカラン、12/2ジョグジャカルタ公演)
ウィスヌ・hp氏チーム　(12/16ポノロゴ公演)

マレーシア　カムルル・フシン氏、アミル・ハムザ氏　(2/14クアラルンプール公演)
アミル・パーカッション　(2/23クダー公演)

(レコーディング)

ジャワ島　レオッグ音楽 (東ジャワ県ポノロゴ市)
クティプンガン音楽 (東ジャワ県スラバヤ市)
ガムラン音楽 (東ジャワ県バニュワンギ市)

バリ島　マデ・スバンディ氏
デワ・ライ氏
ジェゴグ音楽 (ジュンブラナ県ヌガラ村)

スンバ島　ゴング・スンバ音楽 (西スンバ県トダ村、中部スンバ県ワイバクル村)

スラウェシ島　ガンドラン音楽、カチャピ音楽 (南スラウェシ県ブルクンバ市ヘラン村)

マドゥラ島　オコル音楽、サロネン音楽 (マドゥラ県スメネプ市)

ー調査のみ行った芸能

ジャワ島　王宮のガムラン、ジャティラン (ジョグジャカルタ)

バリ島　ガムラン、祭礼日ガルンガンとクニンガンの芸能

スンバ島　田植え唄

ー習得した楽器

ジャワ島　クンダン・レオッグ (ポノロゴ)

バリ島　クンダン・バリ

マレーシア　グンダン・シラット

1. インドネシア・日本伝統芸能コラボレーション公演『プルサダサンタ』

2018年11月26日〜12月3日

写真：バリ公演の様子

今回のアジアフェローでの最初の活動となったのは、バリ舞踊家の小谷野哲郎氏の企画による、インドネシアと日本のアーティストのコラボレーション舞台公演に参加する事だった。これは数年前から継続されているプロジェクトで、インドネシアの伝統の舞踊、音楽、仮面劇をベースに、日本の伝統芸能である能とのコラボレーションで新たな創作をするというものだ。

公演はバリ、ジャカルタ郊外のチカラン、中部ジャワのジョグジャカルタの三ヶ所をツアーして行われた。参加メンバーはインドネシアからバリ舞踊家のセカール氏、ジャワ舞踊家のディディ・ニニ・トゥウォック氏、バリ音楽家のイ・マデ・スバンディ氏率いるチェラケン楽団、日本から能楽師の津村禮次郎氏、バリ舞踊家の小谷野氏、コンテンポラリーダンサーの上田貴宏氏に加えて、初参加となるパーカッショニストの私の10名だった。各界で活躍する一流のアーティストの面々で行われている、質の高いコラボレーション舞台への参加となった。

写真：公演後の様子

写真：バリ公演の様子

メンバーと初対面で、劇音楽の経験もガムランとの共演の経験も無い私には新鮮なことばかりだった。集中した濃密なリハーサルが行われた。インドネシア語で進められる事が多いリハーサルで細かいことまで把握するのが難しかったが、メンバーと寝食や移動といった生活を共にしているので、すぐに慣れて息を合わせる事ができた。そのおかげで本番も集中して臨む事ができた。

舞踊と音楽の関係において、チェラケン楽団の音楽は作曲されている曲の周期の中で舞踊と合わせていくが、自分の打楽器はその音楽に合わせながらも、より瞬発的な肉体との交感を目指して即興するアプローチをとった。ツアーの合間にメンバーでジョグジャカルタの王宮のガムランを見学しに行ったのだが、能楽師の津村氏は王宮で見た舞踊の動きをその日の本番で取り入れておられたので、そこに即興で合わせた。それがうまくいったのはこういう生活を共にするツアーがあったからこそだと思う。

写真：日本人メンバーと食事の様子

写真：ジョグジャカルタ王宮ガムラン

バリの公演は仮面博物館の半野外ステージで行った。雨季のため毎日雨で、本番当日も雨だったのにも関わらず満員の大盛況だった。チカラン公演は日本人用の大型マンションのコミュニティーセンター、ジョグジャカルタは文化庁の伝統的なステージで行った。回を増すごとに全体の流れは洗練されていったが、それぞれの回でも違った良さがあった。日本語とインドネシア語でセリフが話されたが、日本語のわからないインドネシア人やインドネシア語のわからない日本人にも、とても良かった、感動したとの声をたくさん聞いた。本当に素晴らしいアーティストの方々との共演から、得られたものはとても大きかった。今後に繋がる交流もできたので本当に良かった。

このプロジェクトは私が将来的にやりたい事に重なる事が多い。そのため、作品の中で音楽家として学んだ事はもちろん大きかったが、それ以外の制作や舞台演出、海外でのツアーオーガナイズなど、全てされている小谷野氏からそれらの事を学べた事も非常に大きかった。

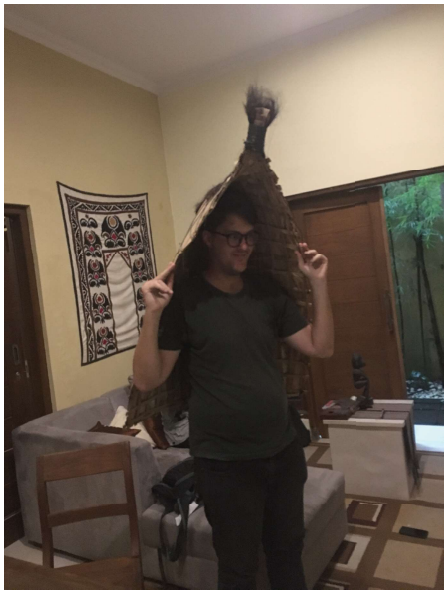
写真：公演のフライヤー

2. ジョグジャカルタ、ソロ伝統芸能の調査。アーティスト、研究者との交流

2018年12月4日〜7日

ジョグジャカルタでは現地在住のアメリカ人民族音楽研究者Palmer Keen氏と会い、インドネシア各地の民俗芸能について教わった。パルマー氏は６年インドネシアに在住しており、インドネシア各地の、それまで誰も研究対象としなかった知られざる民族音楽などを発掘し、調査、録音採集している。彼のウェブサイトで、様々な素晴らしい音楽を知った。既に多くの日本や西洋の人々に研究されているガムランのような音楽について研究している人はたくさんいるが、それ以外の多種多様な音楽について、インドネシア全体を対象として調査している人は私の知る限り彼だけであり、非常に貴重な情報を得る事ができた。

運良くその日ジョグジャカルタ郊外の村でジャティランというトランス儀礼が催されており、Palmer氏に連れて行ってもらって見る事ができた。
太鼓などの楽器と歌の演奏が音響装置で増幅され、大型スピーカーから耳をつんざくような爆音が町に鳴り響く。四角くロープで囲ったフィールドのなかで、男たちが泥だらけになりながら半ばトランス状態で狂ったように踊っている。そして魂が降りて来て憑依状態になり、悶えながら倒れ、押さえ込まれて魂を抜かれ運ばれて行くという、衝撃的な内容だった。



写真：Palmer Keen氏

写真：ジャティランの様子

ジョグジャカルタ市内では観光地にもなっている王宮の豪華絢爛で優雅な宮廷音楽や舞踊などの文化があるが、そのような観光エリアから少し外に出て郊外の村に行くと、市内からは全く想像できないこのような泥臭く生々しい庶民の民族芸能が残っている。それぞれの文化の質感があまりにも違い、その対比がとても興味深かった。

ジョグジャカルタに2日滞在した後、ソロに移動した。郊外に住む音楽家のギリ氏に会いに行き、その周辺のアーティストとセッションしたりして、交流を行った。市内の劇場にワヤン・オランという伝統音楽劇を劇場に鑑賞しに行った。ソロは伝統とコンテンポラリーが自然に融合していて面白い文化がある街だった。またゆっくり滞在したいと思った。

写真：ジョグジャカルタ王宮の舞踊

写真：ギリ氏とセッションの様子

3.ポノロゴの伝統芸能レオッグの調査、太鼓クンダンの習得、コラボレーション公演、レコーディング

2018年12月8日〜21日

写真：ウィスヌ氏、イピン氏とレオッグの演奏家達と

東ジャワ州のポノロゴという町にレオッグ(reog/reyog)という伝統芸能がある。レオッグの事は小谷野氏から話を聞いて初めて知り、youtubeなどで調べて素晴らしい芸能である事を知った。大きな仮面などを使った迫力のある芸能で有名で、特に太鼓が興味深かったので、調査したいと思った。小谷野氏から、レオッグのダンサーで、コンテンポラリーなアーティストのウィスヌ・ハディ・プライトノ氏を紹介していただいた。２週間ほどの間、ウィスヌ氏の家のゲストルームに滞在した。

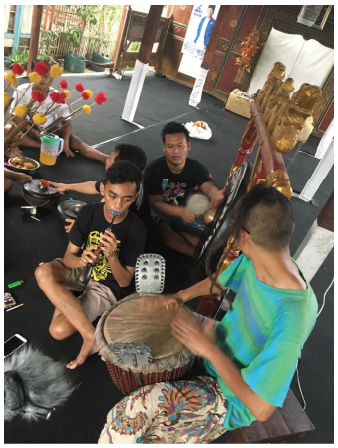
レオッグのパフォーマンスは祭りのシーズンではなかったのでたくさんは見れなかったが、割礼の儀式などの機会があり、何度か見る事ができた。50キロにもなる巨大な仮面を、中の竹を口で咥えて支えダイナミックに踊るダダマラの踊りは大迫力だった。

写真左：プチャンガノンマスクの踊り / 写真右：ダダマラ

最初の１週間はクンダン(太鼓)奏者のイピン氏からクンダンを習った。レオッグの太鼓とダンスの動きの即興的な相互関係について学びたいと思って行ったが、レオッグの音楽は一般的な西洋音楽的解釈や、自分が今までに世界各地で学んだ音楽の概念が全く通じないような独特なフィーリングを含んだもので、非常に難解だった。今回の期間で、全種類のリズムにおける基本的な構成の曲を習得し、各舞踊の意味や歴史的背景をある程度調査することまではできた。だがそれはレオッグの偉大な伝統芸術の一端に触れたといったところで、深い部分まで習得するにはかなり長い期間が必要な事がわかった。

写真：クンダンを演奏するイピン氏

写真：コラボレーションの様子


写真：コラボレーションの様子

滞在の後半にイピン氏のグループとコラボレーションの録音を行った。三日間時間がとれたので、レオッグの音楽の中での様々なバリエーションや、特徴を体で感じる事ができた。そしてお互いにアイディアを出し合い、伝統を少しずつ崩しながらも西洋音楽的な概念に頼らない、独自の音楽を試行錯誤して創作する良いコラボレーションができた。

ウィスヌ氏とヴァイオリニストのプトゥリ氏に段取りしていただき、彼らと日本から合流したダンサーの菜央と共に地元のミュージシャンの方々とコラボレーションのパフォーマンスを行った。パフォーマンスの様子は地元のテレビのニュースにも放映された。ポノロゴでの活動は、後に繋がる偉大な一歩目になったと思える、充実したものとなった。

写真左：公演の看板

写真上：共演したアーティスト

4. バリ島芸能調査、ガルンガンとクニンガンの祭礼調査、伝統太鼓クンダンの習得、コラボレーション、レコーディング

2018年12月22日～2019年1月11日

写真：ガルンガンのバリ獅子舞バロン

バリ島では、インドネシア公演で共演した音楽家イ・マデ・スバンディ氏のスタジオに３週間滞在し、交流を深めた。伝統太鼓を習い、コラボレーションのレコーディングを行った。スタジオはスバンディ氏の家の至近のため、頻繁に会って時間を過ごしたので、生活から伝統文化を学ぶ事ができた。

今回の滞在期間は、バリの祭礼日ガルンガンとクニンガンに合わせた。寺院で行われる各種芸能を取材した。ガルンガンでは前日にはラワールという豚肉料理を作って準備をした。これは男性の仕事である。当日はスバンディ氏の実家のバトゥヤン村の寺院へ参拝し、伝統獅子舞バロンの渡御を見てそれについて村中を歩いて周った。ガルンガンは、善が悪に勝利した事を祝う祭礼期間である。スバンディ氏が家庭に受け入れてくれたおかげで、地元の家庭内で行われるこの静かで神聖な時間を体験する事ができた。

クニンガンでは、喧嘩神輿の祭礼と、トランス儀礼バリス・チナを取材した。喧嘩神輿は、日本と共通するものがあるが、よりプリミティブで、熱狂的なものだった。トランスに入って運ばれる人もいて、とても興味深かった。日本の祭りも昔はこのようなものだったのではないかと思う。バリス・チナは、バリの他の芸能と、音楽も衣装も違い、トランスに入る人が続出するという、珍しい祭りだった。推薦者の小谷野氏の情報提供により、このような貴重な伝統祭礼を体験する事ができた。

写真左：喧嘩神輿の様子

写真下：クニンガンで祈りを捧げられたバイク

スバンディ氏と、二回に渡りコラボレーションのレコーディングを行った。インスピレーションに溢れた新鮮な即興セッションが収録できた。スバンディ氏はバリで音楽をやる人なら誰もが知る、バリを代表する伝統音楽演奏家であり、天才作曲家と称され尊敬される音楽家である。伝統曲の演奏はもちろんだが、コンテンポラリーなガムラン音楽を多数作曲する。常に作曲してるが譜面に書かないため過去の作品は残っておらず、どれくらい作曲しているのか本人も知らないという事には驚いた。氏にとって最新の曲を作曲しているのが現在の日常であり、過去に作曲した曲には特に興味が無いようであった。他、ギター、ベースなどの楽器とのフュージョンバンドBalawanでも活動していて、一度パーカッションでコンサートに参加した。

写真：コラボレーションの様子

写真：Balawanのコンサートの参加した時の様子

写真：コラボレーションの様子

写真：コラボレーションの様子

写真：クンダンのレッスンの様子

バリの伝統太鼓クンダンを習った。四日間だけだったが、集中したレッスンを受けられたので、吸収できたものは大きかった。他の太鼓に応用できる自分にとって革新的なテクニックを得る事ができた。東南アジア各地に似た両面太鼓はあるが、それぞれで楽器の構造や奏法、音色、音楽の構造が違い、多様である。

受け入れ先のスダマニのスタジオにて、受け入れ協力者のデワ・ブラタ氏と会い、ここ数十年のバリの芸能の状況の変遷についてなど、貴重な話を聞く事ができた。スダマニのリハーサルも見学できた。デワ・ブラタ氏の弟であるデワ・ライ氏とセッションレコーディングを行った。トッププレイヤーの一人である氏と、コラボレーションする事によって深い交流ができた。

写真：スダマニのリハーサルの様子

写真：デワ・ライ氏とのコラボレーションの様子

今回交流を深めたアーティストの方々は、伝統を熟知している継承者でありながら、新たなものを創り出すクリエイティビティに溢れたとても素晴らしい音楽家なので、今後もコラボレーションを続けて発展させていきたい。

バリでは伝統の儀礼や、日々の生活のなかでの信仰心や毎日のお祈りなど、今の日本ではかなり無くなってしまった大切なものがある。人々が神に捧げるために各種の芸能を行うのは大切な事だ。良い作品、世界に影響を与えるような作品を創るには、とくにアジア人にとってそのような感覚はとても重要な事であり、そしてそれは普遍的な感覚だと思う。どんなに技術やアイディアがすばらしくても、本当に人々の心に良い影響を与えるのは、良い精神だと思う。今回、生活の中でこのような経験ができたのはとても大きかった。

写真左：スバンディ氏の家族

5. スンバ島、スラウェシ島、マドゥラ島、東ジャワ、西バリの伝統音楽の調査とセッションレコーディング

2019年1月12日〜2月7日

　インドネシア滞在最後の約一ヶ月は、民族音楽学者のパルマー・キーン氏に情報を提供いただき、周辺の島々の伝統音楽の調査とコラボレーション録音を行った。

2019年1月12日〜21日 スンバ島

写真：トダ村の人々

　バリから飛行機で一時間ほどで行けるスンバ島は、これまで観光開発や移住にほとんど注目されなかった事と宗教がイスラム教ではなくキリスト教である事でかなり古い文化が残されており、伝統音楽や文化も、周辺の土地とは全く異なったとてもユニークなものだった。
　まずは島の東部にある東スンバ県のコディ地域の伝統的な村を周り、目的のゴング音楽を探した。探し始めた初日に運良く、葬式をしていたトダ村という村にたどり着く事ができた。とんがり帽子型の茅葺き屋根の独特の伝統家屋、祖先の霊が眠る巨石などがあり、原始時代にタイムスリップしたかのような風景だった。

　村の人々は快く取材を受け入れてくれ、伝統家屋に泊まらせてもらって三日間の葬式の内の後半二日間を密着取材することができた。スンバ音楽は7/8拍子という複雑なリズムを基本としていることは事前調査で分かっていたが、それを実際に葬式で集まった村の人たちがインターロッキング奏法(複数名がそれぞ違ったフレーズを演奏してその組み合わせで音楽を構成する方法)を用いて演奏しているのには感心した。それ以外に12/8拍子や4/4拍子の曲もあったが、22/8拍子という更に複雑な拍子の曲もあり、そういった、プロの

パーカッショニストでも演奏するのが難しいような音楽を、練習などせず、葬式のときに聴いたり演奏するだけの村の誰もが演奏できるという事には本当に驚いた。なぜ、どのようにこの複雑な音楽が生まれたのかは村の人にもわからないが、この地域に伝わる伝統文化の一端に触れ、その偉大さを感じることができた。

ゴング音楽と太鼓の音楽は一日中、何度も演奏された。誰も悲しみを表している人は見当たらず、皆葬式を楽しんでいる様子だった。この葬式で亡くなったのは、英語でガイドをしてくれたルカス氏の兄であったが、ルカス氏から何度も「Are youhappy?」と聞かれ、「葬式だから楽しくしないといけない」と言っていたのが印象的だった。葬式の最後の儀式は、バッファローを殺し、切り分けて人々に配るというものだった。牛を殺す儀式はアジア全土にあるが、ここのものはかなり原始的な形態で、とても貴重なものを見ることができた。

最後に、村の人々のゴング音楽と自分の楽器でコラボレーションし、レコーディングを行った。

写真：トダ村の子供達の演奏の様子

写真：スンバの伝統家屋

写真：バッファローの儀式

写真：コラボレーションの様子

トダ村の後は、中部スンバ県のワイバクル村に滞在した。伝統音楽家で作曲家のエルソン・ウンブ・ライダ氏の家にホームステイし、ガイドしてもらい活動を行った。

写真：エルソン氏とワイバクルの人たち

写真：ゴングを習う様子

ワイバクルの伝統ゴング音楽を習った　。7拍子のインターロッキングが基本だったが、西スンバのゴングとは音階も雰囲気も異なり興味深かった。

ホームステイの裏の田んぼでは田植えが行われており、田植え歌を歌いながらの田植えに出会う事ができた。日本やアジア各地でも、昔はこのような生活に密着した作業歌があり、多くの民謡はそのような歌であるが、作業の機械化により多くは消滅してしまった。歌いながらの田植えに参加した。田植えのスピードがとても早く全くついていけなかったが、美しい田んぼの中で伝統の歌を歌いながらの手植えという、農耕民の芸能のルーツと言える貴重な体験ができた。
最終日にコラボレーションのレコーディングを行った。

写真：田植えに参加している様子

写真:コラボレーションの様子

2019年1月22日〜28日　スラウェシ島　ブルクンバ

南スラウェシ県のブルクンバの伝統音楽を調査するため、プロペラ機でティモール島を乗り継ぎスラウェシ島へ向かった。前日の豪雨による洪水被害があった場所を通過し、ブルクンバに到着した。

イミエン・ダマイ氏のガイドで活動を行った。コンジョ族の打楽器アンサンブルのガンドラン・コンジョの調査と共演、録音を行った。コンジョ族の村の結婚式に行き、演奏に参加した。

写真：ガンドラン・コンジョを習う様子

写真：ガンドラン・コンジョの楽器

写真：コラボレーションの様子

写真：コンジョ族の結婚式の様子

写真：結婚式のダンス

イミエン氏の協力により、マカッサルの太鼓のアンサンブルや他の伝統音楽にも出会い、共演、録音することができた。

写真：マカッサル族の伝統太鼓の演奏家

写真：コラボレーションの様子

2019年1月28日〜2月2日　マドゥラ島　スメネプ

　ジャワ島の北東にはマドゥラ族が住むマドゥラ島がある。ジャワ、バリに近いが異なった文化を持っており、あまり知られていないが素晴らしい伝統音楽がある。大型のスリットドラムを含むアンサンブルのokol音楽とsaronen音楽を演奏する唯一のグループBintang Keramatの調査と共演、レコーディングを行った。

写真：saronenとのコラボレーションの様子

写真：okolとのコラボレーションの様子

写真：スリットドラムを運ぶ様子

2019年2月2日〜2月4日 東ジャワ　スラバヤ

民族音楽研究者のパルマー・キーン氏と合流し、スラバヤの伝統芸能クティプンガンと共演、録音を行った。

写真：コラボレーションの様子

写真：シラットを習う様子

2019年2月5日〜2月6日 東ジャワ　バニュワンギ

　ジャワ島で唯一のバリ人の村、パトマン・テンガ・スブ村で、ガムラン音楽とコラボレーションを行った。バリ島本土ではもう演じられなくなった古い芸能が残っている村で、貴重な芸能とセッション、記録する事ができた。

写真：コラボレーションの様子

2019年2月7日 西バリ　ヌガラ村

　西バリのヌガラ村へ行き、巨大竹製ガムラン、ジェゴグ奏者のワヤン・ガマ氏ととコラボレーションを行った。

写真：コラボレーションの様子

6. マレーシアでのマレー伝統音楽とのコラボレーション公演、太鼓グンダン・シラットの調査と習得

2019年2月8日〜2月26日

2019年2月8日〜2月16日　クアラルンプール

マレーシアでは、まず受け入れ協力者のカムルル・フシン氏に会い、マラ工科大学(UiTM)にてグンダン・シラットを二日間習った。その後、2018年1月制作したコラボレーションCDアルバム『Malay Sunshine』発表公演として、カムルル・フシン氏、アミル・ハムザ氏とクアラルンプールのRAW art space にて公演を行った。

写真上：グンダンを習う様子

写真右：公演の様子

写真：公演後の様子

2019年2月17日〜2月20日 クランタン

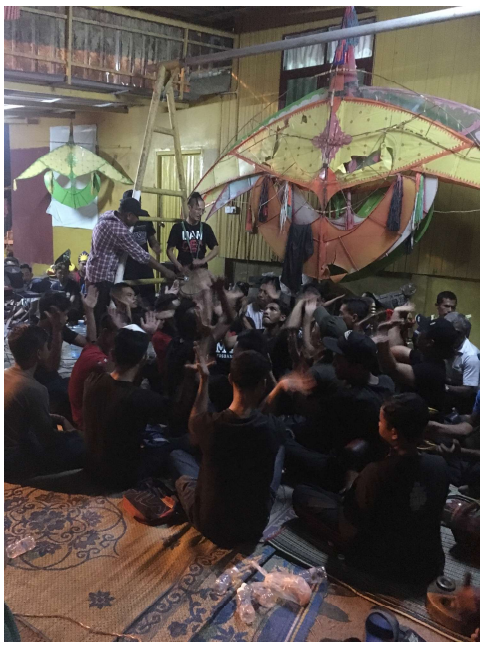
クランタンの州都コタ・バルでは、カルチャーセンターでグンダン・シラット、ルバナ・ウビの公演を見た。

写真：グンダン・シラット

写真：ルバナ・ウビ

前年共演したアーティストMan Megat氏に会い、CDを渡した。その後パシル・マスへ行き、カムルル氏の叔父Pok Jah氏に会い、グンダン・シラットを習った。伝統芸能ディキール・バラットの公演にゲスト参加した。

写真：Pok Jah氏と家族



写真：ディキール・バラットの公演の様子

写真：グンダン・シラットを習う様子

2019年2月22日～2月25日 ネグリスンビラン～クダ

アミル・ハムザ氏率いるマレー伝統音楽のチーム、アミル・パーカッションに参加し、クダでの結婚式での演奏に参加した。

写真：公演の様子

フェローシップ活動を終えて

今回交流した多くのアーティストと公演、録音などのコラボレーション活動を行い、今後も継続して共同で作品づくりをできるような良い関係を作ることができた。ネットワーク作りにおいて、ホームステイやツアーなど生活を共にして親密な関係を持った事も重要だったと思う。今回様々な伝統芸能と出会ったが、それらは農作業や宗教儀礼、結婚式や葬式など、生活に密着し、生活に必要であり、生活から生まれてきたものである。なので、異なった人々が出会い、共に生活を行うことは、新たな芸能の始まりだと思う。アジアの音楽や芸能は主に、全員が相互に作用して全体を作り上げるものなので、アジア全体から生まれてくる新たな芸能に最も必要なものは、アーティスト同士が繋がる事と、集まる場であると言える。アーティスト同士を繋げるには、まず最小単位の自分自身が世界と繋がってコラボレーションを実践する事が必要である。そしてアーティストが集まる場とは、集まった人々が宗教や習慣や国家、民族を越えて、お互いの文化の違いを尊重すると同時に共通点を見つけながら、新たな芸能を作っていく場でなくてはならない。多様で豊潤なアジアの伝統文化に注目し、そこから新たな芸能をうみだす事は可能であると実感しているので、引き続き実践していきたい。今回得た知識や経験は多岐に渡るので、それらを大いに役立て、プロジェクトを進めていこうと思う。

今回録音したものはCD作品として発表する予定である。また、プロジェクト普及のため、活動の映像をyoutubeなどにアップロードしていく事と、今回の活動を報告する上映トークライブイベントを企画している。

スダマニ
http://cudamani.org/

Kamrul Hussin
http://www.kamrulhussin.com.my/biodata.html